



症例としての自伝的ナラティブと性的アイデンティ ティの成立 : クラフト=エビングからJ.A.シモンズ へ

著者	宮崎 かすみ
雑誌名	表現学部紀要
巻	17
ページ	107-127
発行年	2017-03-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004142/

症例としての自伝的ナラティブと 性的アイデンティティの成立

—クラフト=エビングから J・A・シモンズへ

宮崎かすみ

—要旨

本稿は、セクソロジーという学問に特徴的な、患者本人の性的履歴の告白による症例研究という手法を扱う。まずクラフト=エビングが精神医学の一分野として、性病理学、性科学を立ち上げた背景を視野におさめ、そのなかで症例研究が確立されていった経緯をたどる。さらに、症例というナラティブの成立をミシェル・フーコーの権力論に遡って、19世紀にブームを迎えた近代的自伝文学のなかに位置付ける。自伝はブルジョアジーが生み出したナラティブであるが、リスペクタビリティを重んじ、性的な慎ましさを尊重したブルジョアがなぜ赤裸々な性的欲望の履歴を語りえたのか。こうした関心からクラフト=エビングの『性的精神病理学』の症例を紹介・分析してゆく。この分析視角をイギリスに引き継ぎ、性科学を孤軍奮闘して追求していたジョン・アディントン・シモンズを取り上げる。従来、ハヴロック・エリスの仕事とされていたイギリス最初の同性愛研究書である『性的倒錯』に所収された症例は、じつはシモンズが収集したものだったことを資料から明らかにし、シモンズ自身が書き残した自らの赤裸々な性的生活の履歴書であるところの自伝を検証し、己の性的欲望の語りのなかで性的アイデンティティが成立していった過程を跡付ける。

はじめに

十九世紀半ばからヨーロッパの国々において、セックスを—というよりは逸脱的なセクシュアリティを一科学的な分析・研究対象にしようとする機運が台頭した。中流階級人の身体的作法にまつわる規範であるリスペクタビリティおよび、専門家集団として急速に陣容を整えていった医学的権力が牛耳った社会衛生的関心の高まり、そして精神医学が逸脱的、反社会的な性を精神病の兆候として理解するようになったこととも相俟って、性についての学問、セクソロジーが成立した。この学問が対象としたのは、ノーマルな性ではなくもっぱら逸脱的な性の方であった。西欧文化圏において最も重大な関心は、家父長制のユニットである婚姻制度を脅かす同性愛であった。

ダーウィンが1871年に人類の進化をテーマにした『人類の起源』で、人間の進化を、性選択という概念によって説明したことは、この生まれたばかりの学問の発達に拍車をか

けた。これによって、性を自然現象の一つとして学問研究の対象にする道筋が開かれ、男女の間の性愛は人類進化の要因として決定的な重要性を帯びることとなった。一方、同性愛や他の倒錯的セクシュアリティは進化を妨げるものと見なされるようになり、その観点からも重大な関心と呼んだのであった。

このようにして成立した性科学という新しい学問は、のちにジグムント・フロイトという大スターを輩出することになるが、この学問を精神医学において確立させた第一人者は、ウィーン大学教授にして、19世紀のこの学問分野における最も権威あるテキスト、『性的精神病理学』(*Psychopathia sexualis*)の著者、リヒャルト・フォン・クラフト=エビングである。彼は、同性愛を変質論の文脈に結びつける説明を提供しただけでなく、患者の自分語りである「症例」をもとにした考察、「症例研究」という手法を採用し、これを発展させた。

『性的精神病理学』をはじめとする性科学の文献の多くは、逸脱した性的志向をもつ人々から寄せられた性的自我の発達史とも言える、膨大な数の手記(「症例」(case))からなっていた。かつてカトリックの告解という制度において、信者は自らの性的欲望とその過ちを神父に告白したが、性的欲望をめぐる権力の新しい編制下では、人々は医者に告白する。自らの性的嗜好が司法によって犯罪とされ、医学によっては病理と診断される人々が、性科学者や精神科医に自らの性的生活の履歴と欲望を赤裸々に語った。クラフト=エビングやハヴェロック・エリスらがものした性科学のテクストとは、個々人の性的生活を告白した「キタ・セクスアリス」という症例の収集と分類から成っていた。こうした西欧の三世紀にもわたる言説実践によって「性的欲望」なるものがつくられたというのが、ミシェル・フーコーのテーゼである。そして「性的欲望」こそが個人の内面の、最も奥深くに潜んでいる秘密であるがゆえに一層真実でもある、個人のアイデンティティの核心を構成するのだとする。このようにフーコーが描き出したところの言説によって構築された個人の内面性の生成において、個人の性的アイデンティティは重要な契機となっている。そして、フーコーがこのモデルの中核に据えたのは同性愛アイデンティティであった。

フーコーの見取り図では、セクソロジーという知の形をとったセクシュアリティの近代化は、医学が性的逸脱者に対して病理の烙印を押し、彼らを規範的な権力の支配下においたものとして、否定的な意味合いでとらえられている。しかし近年の研究によれば、クラフト=エビングに症例や履歴を提供していた文通者や患者たちは、医学のレッテルを一方的に押し付けられた受け身の犠牲者というだけではないことが明らかになってきている⁽¹⁾。オーステルフイス(Oosterhuis)は、クラフト=エビングの手元に残されていた患者たちの手紙を直接調査することで、クラフト=エビングに向けて綴られた赤裸々な言葉から、彼らが積極的にこの協同作業に取り組んでいたことを明らかにしている。そしてクラフト=エビングの性科学の意義を再評価し、性的倒錯者たちの赤裸々な告白がもつ独特の迫力抜きには、性科学の理論がこれほど発展することはなかったとして、大きな意義を認めている⁽²⁾。

本稿では、クラフト=エビングが確立した症例的手法に焦点を当てる。まずクラフト=エ

ビングが精神医学からアプローチして性科学という学問を発展させた経緯をたどり、二章では、彼の『性的精神病理学』の大きな特徴をなす症例研究について考察する。その際、性的アイデンティティを形成したとされる症例というナラティブを、近代以降に発達した自伝文学と比較して考察する。三章では、同書に掲載された同性愛者の自分語りを検討し、その歴史的意義を考察する。最後に、その視点を、クラフト=エビングらが展開した大陸の性科学研究が普及していなかったとされるイギリスへと移し、『性的倒錯』の、消された共著者、ジョン・アディントン・シモンズを取り上げる。『性的倒錯』に採用された症例収集の真の貢献者はシモンズであったし、その手法は彼が独自に開発したものだ。さらに彼は、『性的倒錯』に自ら症例を提供しているのみならず、同性愛的欲望に振り回された自らの生涯を告白する自伝を遺している。クラフト=エビングの症例が、イギリスにどう引き継がれたかを、シモンズを通して検証する。

イギリスは近年の同性愛史研究によって、性科学による同性愛という概念が1930年代頃まで浸透していなかったこと、とはいえ男性を愛する男性としてのアイデンティティは性科学の成立よりもはるか前の19世紀前半にはできていたことが唱えられている⁽³⁾。いずれにせよイギリスは、こと性科学に関しては特殊に遅れた段階にあった。その中にあって、例外的に大陸の性科学と同レベルの知見に到達していたシモンズであったが、彼が症例収集に傾けていた熱意を資料から析出するとともに、彼が遺した自伝と、それがたどった運命を通して、イギリスに特殊な事情とリスペクタビリティの意識を浮かび上がらせることを目指す。

1. クラフト=エビング——精神科医と性科学者として

リヒャルト・フォン・クラフト=エビングはドイツのマンハイムで1840年に生まれた⁽⁴⁾。男爵位をもつクラフト=エビング家はカトリック教徒であったが、そのことは彼が後年熱心に性的倒錯者から症例を収集したことといくらか関係があるかもしれない。母方の祖父、カール・ミッテルマイヤが犯罪法の教鞭をとるハイデルベルグ大学で医学を修めた。

精神科医として立つことを決めた彼は、イルナウ精神病院に職を得て研鑽を積んだ。ここでは、フランスのモレルの変質論やダーウィニズム生物学、実験的精神医学といった新潮流も盛んに取り入れられていた。

クラフト=エビングが精神科医としてのスタートを切った1860年代は、精神科医のステイタスは低く、この状態は世紀末あたりまで続いた。精神病院は、貧民、乞食、老人、身体障害者らの収容所のような様相を帯びており、治療を施すなどという雰囲気ではなかった。70年代に入り、ようやく環境が向上してゆき、中流階級の患者を治療するための医学が発達していった。それでも精神病院は、治療施設というよりは監禁施設と認識されており、精神科医も治療者というよりは法と秩序の擁護者としての役割のほうが大きかった。彼らの専門職としての切り札は、人の精神を処方することだったが、この役割は精神

科医の特権ではなく、伝統的には哲学者、法律家、聖職者も担っていた。精神科医の専門性はなかなか確立しなかったが、それでもようやくドイツやオーストリアの大学医学部に精神医学のポストが置かれるようになっていった。彼は73年にストラスブール大学に職を得てから、グラーツ大学を経て、89年にはウィーン大学の教授に上りつめた。オーストリアで最も権威ある精神・法医学会の会長職にも就任して精神医学界を牽引した。

クラフト=エビングの貢献としては、精神医学の対象範囲を広げたことがあげられる。夢、夢遊病、幻覚、酩酊、アルコール摂取、癲癇、生殖器の異常による骨盤の機能障害、月経、過度の自慰、オーガズムの伴わない性的興奮、意志力減退等は、精神病というほどではないものの、精神的不調の原因になりうるものとして考察の対象とした。また、異常と正常の間に明確な境界線が存在しないことを近代医学が明らかにしたという見解が、彼の疾病に関する考えの基本にあった。この知見は、心神耗弱状態で犯した犯罪は、責任能力を減じられるべきであるという主張にもつながる。祖父が法医学にも近い立場にいたことから、彼は精神科医として法医学にも造詣が深かった。とりわけ、ソドミー裁判で法医学者が身体的証拠しか扱わなかったのに対して、クラフト=エビングを始めとする精神科医は被告の人間性に焦点をあてたが、世紀転換期には精神医学的アプローチが法医学に取って代わり、司法の場における精神科医の意見が重視されるようになっていった。

クラフト=エビングは、理論や解剖よりも臨床を重んじ、患者の行動や心理の分析から得られる知見にこだわった。脳の解剖に重きを置く当時の主流派とは一線を画し、患者の脳だけでなく、一人の人間として患者を診た。クラフト=エビングは脳の解剖や神経学に基づくのではない、臨床での徹底的な観察に基づく精神医学を発達させたと言ってよい。そして時代はクラフト=エビングにとって追い風だった。結局、クラフト=エビングのような心理学的な精神医学がその後の主流を占めるようになり、クレペリンが同様の臨床的精神医学を発展させて20世紀の基調とした⁽⁵⁾。

クラフト=エビングのこうした手法は、さらに患者の履歴の詳細な詳述へと向かわせる。精神医学が扱うべきは、個々の疾病よりも常に病んだ人間であるべきだと彼自身が書いている⁽⁶⁾。彼はイルナウの時代にすでに個人の症例研究的手法に着手していた⁽⁷⁾。精神科医が「患者個人の精神と身体両面の体質および気質全般」をよく観察するべきなのは、「精神的失調は患者本人のそれまでの人生と人格の発達の状態の結果によるところが大きい」⁽⁸⁾と彼が考えていたからである。クラフト=エビングが定めた症例記述のひな形によれば、身体的外見、脳の欠陥、遺伝的疾患素質の有無から、幼年期の病歴やトラウマ的なエピソード、知的能力および欠陥、情緒および精神的組成に至るまで首尾一貫しかつ相互に関連した像を提示しなくてはならないとされた⁽⁹⁾。症例の記述を中心にした彼の研究手法は、後に彼の名を世に広めた性病理学研究において遺憾なく発揮された。他の精神科医は兆候の分類や自分たちの説を主張するのが目的だったのに対して、症例の緻密な描写こそが彼の研究の核であった。彼が生涯にわたって収集した症例の数は二万を超えた⁽¹⁰⁾。

クラフト=エビングは『性的精神病理学』によってその名を知られていることから、性

科学のパイオニアとみなされることも多いが、一貫して精神科医かつ精神医学者だったのであり、本人に性科学という新しい学問を立ち上げようという意図があったわけではない。それではなぜクラフト=エビングは性科学研究の金字塔ともいえる研究を成し遂げることになったのか。そもそも彼が性に関心を向けたのは、精神病院に勤務していた初期の頃、他の精神病と診断されている患者が性的な問題も抱えていることが多いと気づいてからである。また彼は精神科医として法廷に出廷したり報告書を書いたりして法医学に関わったが、このときの経験から特に性的な不調は、それ単独の病ではなく、遺伝的な変質の兆候であると考えようになった。変質論はフランスのモレルが提唱した精神学説で、いったん病を得ると生体が衰弱してその体質が遺伝的かつ進行的に伝わってゆくとする見解である。クラフト=エビングは性病理学にこの遺伝的変質論を取り込んだ最初の人であった。

クラフト=エビングは、過度の自慰のような性的逸脱は、精神病の原因というよりその兆候であると考え、それが神経疲労を引き起こし、さらに身体全体の健康に害を及ぼすと唱えた。1869年ごろから、性欲が問題となる症例を発表しはじめ、法廷から求められて書いた法医学の報告には、強姦や性的暴力、同性愛などを扱うようになっていった。

クラフト=エビングが性病理学について初めて体系的な論文を書いたのは1877年のことである。そこで同性愛を論じ、これを意味する「反対的性感情」(contrary sexual feeling)という言葉は初めて使ったが、この時点では、同性愛を変質論と結びつけて生得的とする理解には達していなかった。「反対的性感情」はカール・ヴェストファルの用語であるが、ほかにもカール・ハインリヒ・ウルリヒスが唱えた「ユーレニズム」(uranism)という言葉もあった。ウルリヒスはもともとクラフト=エビングの患者であり、彼が同性愛に関心をもちようになったのは、ウルリヒスとの交流によるところが大きかった⁽¹⁾。ウルリヒスは弁護士で、1869年に自らの性的傾向に悩み、クラフト=エビングのところに来てきた。二人は意気投合して個人的な親交を結び、66年以降は、自らの同性愛を公に表明していたウルリヒスがこれについて書いた論考をクラフト=エビングに送るようになっていた。ウルリヒスはアーニング(urning、男性同性愛のこと)を正常な生物学的現象だとして、法律による取り締まりを撤廃するよう強く主張した。ウルリヒスの見解にクラフト=エビングは共鳴し、このテーマの重要性を認識しはじめる一方、ウルリヒスも精神科医であるクラフト=エビングを人道的な見地からアプローチしているとして評価した。後にウルリヒスは、彼が同性愛の症例を精神病院や監獄のみから集めたとして批判することになる。クラフト=エビングの最初の論考に関してはウルリヒスの批判は当たっているが、80年代に彼が集めた症例は、彼の患者との共同作業や一般の人々が彼に寄せた手紙などからなっていた。

次章では、症例として自分の性的欲望の履歴を語るという『性的精神病理学』に特徴的な記述に焦点をあて、ナラティブとしてのその特性を歴史的に検討して、その意義を位置づけてみたい。

2. 症例としての自分語りと自伝的ナラティブ

クラフト＝エビングは精神医学分野において性を病理学的に解明しようとするにあたって、性的欲望を生物的本能とのみとらえることはせず、個々人の人生の履歴と分かちがたく結びつき、経験に裏打ちされた個人的な意味を帯びたものとして提示した。患者自らが自分の半生を振り返って自己省察的に性的欲望について語る事例を「症例」(case) と称し、それに基づく研究は、「症例研究」と呼ばれる。フーコーは、ベンサムのパノプチコンとして現れた規律・訓練的権力が「個人」を一つの事例へと仕上げ、それを認識の対象としたとする。その端的な例は試験という制度であるが、「記述され評価され測定され他の個人と比較され」た個人の事例は、精神医学においては「症例」として、「個人別の記述と生活的物語」⁽¹²⁾ となった。この種の権力が発動した 18 世紀以降、小説という文学ジャンルが個人の心理や秘密に肉薄したのと同様に、《心・精神》という語根をもつすべての学問も個人の症例を研究対象とした。こうして語られた事例および症例こそ近代的アイデンティティの原型となった。そこで本章では、「症例」というナラティブを広い文脈から考察したい。

性科学における「症例」とは、特殊な性的欲望をもつ個人の生育歴の記述であるのと同時に、もっとも語りにくい秘密であるところの性的欲望の告白でもある。フーコーは「症例・事例」を、近代以降現れた《規律・訓練》を旨とする権力がその対象を訓育するために設置した「試験」という装置が行使した、対象を支配するための具体的手段の一つとして位置づける⁽¹³⁾。この権力は、個人という実在を造り出し、個々人を権力行使の客体ならびに道具として手に入れることに成功したのだが、その成功はこの試験という道具のすぐれた特質に拠るところが大きかったという。試験という装置の特質は、対象を階層に分けて序列化しようとする視線と、規格化にむけた処罰・制裁を行使する際に、個々人に可視性を設定した点である。試験においては、得点という可視性によって個々人が差異化されたとえで制裁を加えられるが、こうして差異化され個別化された対象の個人性が記録文書に書き記される。この個人性を書き記すという書記行為は、規律・訓練の歯車装置の本質をなす部品であった。規律・訓練を受ける対象の個人を書き記し、記録するための一連の記号体系が形成された 18 世紀において、個人的なるものの最初の定式化が行われたとフーコーは見る。たとえば病院では、試験は診断・検査という形をとるが、そこでは記述可能で分析可能な客体として個人を組み立て、さらに比較からなる体系のなかに位置づける。こうして新たに成立した記録作成技術に支えられて、試験という制度は個人を一つの「症例・事例」として記述する。かつて、英雄や国王のような権力をもつ特権的人物の勲功や事績だけが記述の対象となり物語にされたのだが、《規律・訓練》の権力はこの関係性を転倒させ、はるかに身分の下、支配の対象となる者について記述し記録する。つまり、個人性を記述することは、一つの取締り手段であり支配の方策となったのである。

逆に言えば、こうした事例・症例として記述されたり物語られたりするの、取り締ま

りと、支配が必要とされるということであるから、正常な成人よりも、基準から逸脱した人々—子供、病人、狂人、受刑者—こそが頻繁にその対象となった。権力がますます匿名的かつ機能的になるにつれて、「権力が行使される当の相手のほうは、ますます明確に個人化される傾向をおびる」⁽¹⁴⁾。個人化とは、個人の特質・特徴が際立ったものとして語られるということであるが、それは由緒正しい血筋の出身であるとか、勲功を立てたといったことの故ではない。《規範》から逸脱しているからなのである。そもそも“case”という言葉には、「事例、場合」といった意味のほかに、「症例、患者、病人」という医療の意味と、そこから派生して口語では「変わり者、扱いにくいやつ、ませた子供」という意味合いもある。このことからわかるように、事例や症例として語られる対象とは、正常で健康かつ法にかなった大人ではなく、そこから逸脱した何者かなのである。

このようにして語られ始めた個人性こそが、近代的アイデンティティの原型となる。というのも、性科学で採用された症例において、患者は叙述される対象となるだけでなく自らが主体となって自分の性的欲望を語りもしたからである。その点が一般的な症例とこの種の自伝が異なる点である。フーコーにとってこの種の言説は、キリスト教の告解の近代版であった。そうした語りでは、男も女も自らの罪深い過ちを告白するだけでなく、内面の恥ずべき真実をも吐露したのである。クラフト=エビングをはじめとする性科学の文献こそ、フーコーが言うところの「告白の科学」が発達する重要な場として機能した。この「告白の科学」は、個々人を支配し陶冶しただけでなく、アイデンティティなるものを与えたのである。

クラフト=エビングは性的欲望を生物的本能とのみとらえるのではなく、個人の人生の歴史と分かちがたく結びつき、経験からもたらされた個人的な意味を充填された何ものかとして提示した。オーステルフイスは、クラフト=エビングの症例を、18世紀に始まり19世紀に発達した近代の自伝・伝記ジャンルの特殊な形態とみなし、その視点からエビングの症例にアプローチする。フーコーが示した見取り図でも、規律的な権力が生まれたのが18世紀、そしてこの時期に近代的なアイデンティティが成立したともされる。このような新しい権力の編制が、文芸ジャンルにおいても個人の物語が語られる焦点を移行させたことをフーコーは指摘する。叙事詩的なものから小説的なものへ、華々しい行為から秘密の個性へ、長期間の流謫から幼少年期の内面的探求へと文学的関心が移動したのは、規律・訓練的な社会の成立と連動していたというのである。そうすると、性科学の症例は、人間の内面の真実に肉薄する伝記（自伝）という語りの様式が、医療で生み出された症例という個人についての記述へと収斂した、歴史的に固有の磁場をなしていることになる。そこでこの歴史性を浮かび上がらせるために、次に自伝文学における告白の語りについて考察してみよう。

18世紀の啓蒙期に浮上してきた個人のアイデンティティという概念に呼応して生まれた文芸ジャンルの代表は、小説だった。小説とは、神話のような人類共通の経験・記憶からなる物語とは異なり、個性的かつ個別的な人間の、かつて生きられたことのない新しい

人生の経験を物語る文芸の様式である。小説に特徴的な要素は、真実に肉薄するリアリズムと虚構性である。一方、ほぼ同じ時期に成立した自伝・伝記ジャンルは、個性が際立った一人の人間を主人公としその内面的成長に関心をもつという面では共通するものの、こちらで重視されるのは、リアリズムを乗り越えて、真実そのものである。小説を特徴づけていた虚構性は自伝・伝記的語りでは排除され、他の誰でもない自分という個人が真実の自己を発見する道程にことさらにこだわる語りの様式として「自伝」(autobiography) というジャンルが確立する。この言葉が最初に登場したのは、1775 年前後であるが、ヴィクトリア朝初頭まではあまり定着していなかった。ゲーテ (1749-1832) やジャン・ジャック・ルソー (1712-1778) は、一般的な人間性とか模範的な事例などとは違う、際立って個性的な個人の経験と内面性を記述することによって近代の自伝の先鞭をつけた。それ以降、近代的自伝では、出来事そのものよりも、その出来事が内面的自己や主体的経験の深部に与えた影響が重視される。

近代の自伝文学を特徴づけるのは、「真なる」自己の発見と、発見された自己に徹頭徹尾正直であろうとする精神である⁽¹⁵⁾。『告白』(1782-89) の執筆をもってルソーは、生のもっとも内奥の経験に対して完璧かつ嘘偽りない記述を与えた歴史上最初の人物となった。そこには好ましからざる出来事や秘められた欲望も包み隠さずに記されている。たとえばこの自伝のなかで、自分の子供を全員孤児院に捨てたことを告白している一方で、自慰やマゾキズム、性器露出や同性愛などの体験なども暴露している。さらに彼は、児童期と青春期を強調して新たな地平を切り開いたが、この時期は性格と人格的成長と自己の理想を育む揺籃期であり、これは外界に対して自己の良心の自律性を確保することによって実現されると主張した。こうした考えに、ルソーが措定した人工的な社会的役割と真なる自己とが対立するという図式が確認できる。当時、一般的には、公的世界が内面的経験からなる個人領域より優位であると考えられていた。しかし、彼は安定的で標準的な社会的自己よりも、世界から隔絶した、流動的で唯一無二の個人的自己の価値のほうを信奉した。ルソーは、偽善と見せかけからなる因習的な社会の価値観を切り捨て、自分自身に対して完璧に誠実であるほうを選んだ。いささか特異な性的欲望と妄想の暴露的な告白は、彼が赤裸々な真実を追求していたことの何よりの証左である。

ルソーのこの挑戦的な試みは、19 世紀における自伝的文学ジャンルの流行に至る道筋を準備することになった。近代の自伝は、作者の人生に起こる出来事の記録ではなく、主人公の人格、そして真なる自己の発見に至る旅程を描くことこそが期待される。何よりも自伝文学の魅力は、自分のプライベートな領域の真実を語り、ふつうなら隠したがするような性格や行為についても徹底的に暴かれる真実の暴露にあった。このジャンルが人気を博し存続できたのには、自己を率直に暴露することの必要性が認識されていたからだった。内面生活を露わにすることは、自伝文学を面白い読み物にするために不可欠な要素だったが、リスpekタビリティを重んじる 19 世紀のブルジョア社会においてそれはいささか剣呑なことであったに違いない。しかしながら、自伝文学は、個人の差異を際立たせるため

に必要な空間を確保する主要な文学ジャンルとして確立された⁽¹⁶⁾。この矛盾をルソーが解き明かしてくれる。『告白』の冒頭で、人と違って個性的であることこそが個人の価値の源泉でありその尺度なのであると、高らかに宣言する。

私は自分の同胞たちに、一人の人間を、自然の真実のままに示したいと思う。そしてその人間というのは私である。(中略)

私は自分が見たどの人のようにもつくられてはいない。現に存在するどの人のようにもつくられてはいないとあえて信じている。すぐれてはいないとしても、少なくとも別の人間である。⁽¹⁷⁾

ルソーは、このように唯一無二の自分自身の過去をありのままに示したその告白が真実であること、率直であることに拘りをもつ。そして「軽蔑すべき、卑しかったときもそのままに」告白したからこそ、この告白には価値があると誇らしげに語る。

ルソーの告白の直後から 1830 年くらいまでに西欧諸国では、主に身体や性にかかわる規範としてリスペクタビリティと呼ばれる価値規範が中流階級に成立した。ピアノの猫足が女性の太ももを連想させるという理由でピアノにカバーをかけたという逸話が有名なヴィクトリア朝の厳格な性道徳とされるのも、このリスペクタビリティに由来するものであった。中流階級人たるもの、こうした価値観のもとで自己の性的欲望をコントロールして慎み深くあらねばならないとされていた。それにもかかわらず、ルソーという偉大な先達者が語ったような、かけがえのない自己の内面性の開示の必要性もまた痛感されていた。自伝的なナラティブにあるような自己理解は、19 世紀の中流階級人にとって、自己の主体性を表現するための要諦であった。内省と自己の暴露は、教養ある中流階級の勃興によって社会的に広く支持されるようになる。19 世紀には、世紀前半からのロマン主義によって目覚めた内向性、内面への訴求的な精神が発達してきていた。

18 世紀西欧において「自己」が発明されたとされるが、これは個人的アイデンティティという新しい概念が登場したことを指す。これに伴い、公的空間と個人的空間が切り離され、プライバシーという観念も生まれた。啓蒙期の思想家たちは人間存在を地縁的共同体や血縁などから切り離して一人ひとりの独立した存在として認識するようになる。ジョン・ロックは、一人ひとりの人間の差異は、魂によるのではなく、アイデンティティによるのだと説いた。それまでの時代、人間は地位や身分、人格、品性などから構成されるキャラクターによって認識されていたが、啓蒙思想家たちは究極のアトム化された個人に、時間を超えた一人の人間の身体を貫く同一性として、アイデンティティという概念を指定した。生まれた時から老いて死ぬまで一つの有機的体をもち続ける。それが近代における個人であり、その個人を特定する根拠がアイデンティティとなったのである。共同体や社会的地位から切り離された個々人は、自分が何者であるかを自分自身で定義しなくてはならなくなった。18 世紀以降の西欧社会において、個人を特定させる要素、つまりアイ

デンティティの構成要素は社会制度に属する外的なものから、内面的な動機、衝動、個人的欲望などといった精神的なものへと移行していった。個人のアイデンティティとは、真実にして嘘偽りのない「内面的自己」を意味するようになった。

さらに、ロマン主義の精神は、社会という組織を個人に敵対するものとして認識した。内面的自己を内包する個人は、自らを取り巻く社会と対決しながら独自の感受性と内的自己の啓発によって人間的成長を遂げるべきとされた。社会の掟と、自己の内的欲求との間の葛藤に悩む人間というのは、ゲーテが『若きウェルテルの悩み』(1774年)で描いて以来、小説の恰好のモチーフとなったが、その淵源はこの時代にあった。

自己の独自性を涵養し、自己を社会と対立する者として理解する人間観は、公的領域と私的領域の分離に拍車をかけた。19世紀のブルジョア文化は、個人の幸福を追求し、その幸福は家庭において実現されるものとなった。家庭という私生活空間の価値が増し、これがストレスに満ちた競争や争いの多い社会からの避難所となっていく。

このようなブルジョア文化において、自己に誠実であること・嘘偽りがなく、という理想が際立った重要性を帯びてくる。と同時に、この誠実さの上に内省、自己観察、自己表現がなされていった。好ましい感情のみならず悪しき情念をも含めた感情がさまざまに交錯する心性がまっとうな人間性の発達にとって必要なことだとみなされ、リスペクタビリティが強い慎重さ・上品ぶりとは相いれない内容の自伝的告白を許容するどころか歓迎さえするという人々の意識が醸成されつつあった。リスペクタビリティが表向きは抑圧し、無視し、排除するものを、敢えてさらけ出すことが正しいことだと考えられる。こうした自己暴露を正当化していたのが、自己に誠実であれという意識だった。

ますます活発に生産されるようになっていった自伝的ナラティブであるが、この語りが伝記作者たちの言うほどに、ありのままに個人の内面をさらけ出していたと想定することはできない。近代の自伝的ナラティブは、自己暴露と自己創造の間で宙づりになっていた⁽¹⁸⁾。そもそも読者に読まれることを想定して自伝を書くという行為は、完全にプライベートなことではない。自己の内面を語るということ自体が、社会的に共有された、他者のものである言語と既存のナラティブの枠組み・メタファーに載せることで初めて言語化が可能になるのだ。ある程度は、同じ文化コードに属している人々が了解可能なナラティブのパターンに適合させているのである。これを突き詰めれば、「自己」とは、言語を通して表現されているというよりは、言語によってつくられた産物であるとする言語構築主義の主張となる⁽¹⁹⁾。この立場からすると、個人のアイデンティティなるものも語りによるフィクションにすぎないことになる。

他方、哲学者のマッキンタイア (MacIntyre) は、「人間とは行為においても実践においても、本質的に物語を語る動物なのである」⁽²⁰⁾と述べる。そして、物語は語られる前に、すでに生きられているのだとも。物語が現実の人生に意味を与える。マッキンタイアによれば、過去を想起し、未来を予想することがなければ、一貫した確かな自己の意識をもつことなどできない。このとき過去と未来をつなぎ一つの連続体として貫徹させるものが、物

語の秩序なのである。物語の秩序がなければ、私たちの人生は方向性も意味もないものになってしまう。人生についてのナラティブは、多かれ少なかれ、人間の振る舞いを導き、規制もしている。人間の行動は常に自伝的内省の対象となる。人は、いかにして合目的かつ道徳的に振舞うべきかの手掛かりをえたいときに、物語を必要とする。人間の行動も、そして物語にもどこか終着点がなくては、人は生きてゆけないのである⁽²¹⁾。

これまで、自らの性的欲望の告白として成立した性科学の「症例」が成立した歴史的経緯を探りながら、これを近代的自伝の一種と捉え、自伝が内面の暴露という種類の語りを獲得した経緯を概観してきた。次に、クラフト=エビングが集め、掲載した「症例」そのものを分析し、それらの語りのなかで同性愛的アイデンティティがいかに形をなしていったかを考察したい。

3. クラフト=エビングの『性的精神病理学』と自伝的症例

クラフト=エビングは『性的精神病理学』(*Psychopathia sexualis*)の冒頭で、イギリスの精神科医ヘンリー・モーズリー (Henry Maudsley) の言葉を引用して、こう述べる。「性的感情こそは、社会が発展するための礎である」⁽²²⁾。そして性的生活は、男性の活動、社会生活、家庭生活を営む力を発揮させる個人的および社会的関係性における重要な要素であると続ける。「性的感情は、すべての倫理の、そしておそらくは美学および宗教の根源である」。ダーウィニズムの洗礼を受けた社会において、性という現象はもはや原罪などといって否定されるべきものではなく、人間社会の発展や進歩に大きな意味を占める重要な要素となっていた。とはいえ性は、人間の動物的本能に根差す剣呑なものでもある。「人生とは、動物的本能と道徳性のあいだの絶えることのない戦いである」⁽²³⁾。だからこそ、性本能をうまくコントロールして正しい道に導かなければならない。性についての科学が必要なゆえんである。

全部で六章からなる本書は、性愛についての一般的知見、身体からのアプローチ、未開民族にみられる性習俗などの人類学的知見、一般的な病理と特殊な病理状態、最後に病理的な性の法的取扱いという構成になっている。病理を扱う部分が本書の白眉にあたる部分で、具体的な症例をクラフト=エビングが様々に分類し名づけを行っている。有名なサディズム、マゾキズム、フェティシズムといった言葉もこの中から生まれた。

女性が男性を、男性が女性を性的欲望の対象にするものをノーマルとするならば、その反対、女性が女性、男性が男性を求めるという性愛全般を「反対的性感情」として括るが、そのなかで同性愛 (homosexual) として分類されるのは、患者が変質的体質をもち、その結果進行的な遺伝疾患を潜在的に秘め、その兆候の一つとして倒錯的欲望が発現している場合である。クラフト=エビングは同性愛の原因として遺伝的変質の可能性を認めていたから、症例の書き出しは、必ず両親や一族において精神的疾患もしくは変質のあるなしから始まる。

1903年に刊行された第12版（最終版）中、自伝をそのまま引用している唯一の男性同性愛の症例を検討してみたい。「症例146」⁽²⁴⁾、クラフト＝エビングのクリニックを訪れたX.Y.として表記される医者は、浮浪者と街頭で不道德な振る舞いをしていたところを警備員に見つかり逮捕されたものの幸いにも起訴は免れた。何年にもわたってあらゆる階級の男たちと関係をもち、病んだ家系の出身でもある。父方の祖父は狂気に襲われて自殺し、父親も変人。従弟にXと同じ性質の罪を犯した者がいる。父方の大叔父は両性具有。本人も子供のときから神経質だった。男の子が好む遊びには関心がなく、女の子の遊びを好んだ。思春期になっても男性にしか興味がなく、女性との交わりを避け続けた。

以下はXが書いた自伝からの抜粋である。「自分が性的に目覚めたのは13歳のとき、それ以降、強そうに見える若い男性を求めた。当初はこうしたことが異常なのかどうかについて確固とした考えはなかった。しかし自分の周囲の友人たちの性の嗜好を見聞して、自分は異常だと認識した」。その後17歳で高校の教師に監視されて寮生活を送っていたとき、その教師の息子と関係をもったのが初めての性体験だった。その後知り合った自分と同じ性向をもつ芸術家からこうしたことはよくあるのだと聞かされた。「こんな異常性をもつのは自分一人であると考えてしばしば落ち込んでいたのだが、この情報のお蔭でそうした考えを捨て去ることができた」。

大学での医学教育、さらに医者としての訓練などを経て、Xはドイツの北の地方に職を得て落ち着いた。その状況で性欲を満たすことは難しく、コカインを使って性欲を減退させていた。ある晩欲望を抑えられなくなったXは街はずれの路上で行為に及んでしまい、翌日警察に連行された。起訴は免れたものの、この件の後ドイツを離れ海外に居場所を求めた。「他のあらゆる異常な欲望と同様、単に意志の力によって抑圧することなどできないものが、法律とも世論とも敵対しない場所」である。

また医者として自分と同種の人間を多数観察する立場にあることから、クラフト＝エビングに役に立つと思われる事例をいくつか紹介している。倒錯者たち同士の間では自分たちのことを‘aunts’とか、ウィーンでは‘sisters’と呼び合っている。Xはウィーンの情報に通じているが、しかし「ほとんどの大都市にもそうした人間たちが集まる発展場がある」。

長い自伝をXはこう締めくくる。「‘aunts’の大多数は、自分も含めて、自分たちの異常を不幸だなどとは微塵も思っていない。それどころか自分たちのこの状態が変わるのは嫌だと思うだろう。それに、自分やほかの仲間の意見では、この生まれつきの状態（同性愛）は何か外的な作用によって影響されたりすることはないのだから、刑法の該当する条項を改善して、罰則の対象を強姦とか公序良俗を著しく乱すものだけに変更してもらいたいと皆切に願っている」。

Xが自らに同性愛者というアイデンティティをもつに至ったのは、自分と同じような性向をもつ者が多数いることを知ったからだった。そして彼らと交流をもち、情報を交換するなかでそのアイデンティティが確固としたものになっていったことが読み取れる。医者ともあろうXが警察に捕まり、あわや起訴されるかという屈辱的な体験をして、故国を

追われてさえ、自分の性向を否定的にとらえてはおらず、強姦などとは区別して法的処罰の対象からはずしてほしいと堂々と宣言している。ここには確かに同性愛アイデンティティの成立が見て取れる。

さらに、医師という専門的職業をもつXは、この自伝のなかで自分が性的な満足を得る行為をこと細かく報告している。多少、逡巡しながらも敢えてここまで赤裸々に告白する理由を彼はこう語る。「以下の告白が貴殿（クラフト＝エビングのこと）の感情を害しないことを希望します。最初はこの部分は省略しようと思っていました。しかしこの自伝情報を完璧にするためにやはり入れなくてはならないと思い直しました。この事実は、この症例履歴（case history）に重要な資料を提供することになるからです」。

先の章で、人々がなぜ、普通は隠しておきたいようなあるいは人に嫌悪感を催させるかもしれないと思うほどの性的な細部を赤裸々に告白する心性を獲得したかについて考察した。ここにはカトリックの告解に駆り立てていたような悔悛の情はない。自分たちのような性向を生まれつきもつ者らを科学の研究のために自ら症例として差し出して、現在の抑圧と偏見から解放してもらいたいという希望にかけているのである。

もう一つ、男性性を帯びつつある女性同性愛者の自伝的記述を紹介したい。26歳の彼女は数か月前に結婚したばかりだった。結婚式の直後、彼女は突然、ある女性客の首にすがりついてキスをしまくり恋人のように愛撫した。このことがスキャンダルとなって、彼女の夫がクラフト＝エビングの所に連れてきたのだった。彼女は結婚の数か月前にメランコリーに陥り、自殺を考え、親しい女友達に以下のような別れの手紙を書き送った。

私は女の子として生まれましたが、見当違いの教育のせいで、私の激しやすい想像力が早くからおかしな方向に導かれてしまいました。12歳のときに私は男の子として振舞い、女性たちの注目を得たいという狂気に取りつかれてしまったのです。私はこの異常な欲求を狂気と思っていましたが、この欲求は、宿命のように、年々高じてゆきました。この狂気を自分から取り除こうとする力はなくなってしまいました。（中略）私は男性のように感じて、積極的な役割を演じるように自分を駆り立てました。活力みなぎる気性、激しい感受性と根深い倒錯的欲望は、私をレズビアン・ラブの鎖に縛られる者にしてしまったのです。

（中略）

自然は私の性を作るときに間違いをおかしてしまったから、私はその罪を一生償わなくてはなりません。（中略）

私はあなたの甘美な体を求めて身もだえしました。私はあなたのヴィクターをライバルとして嫉妬して、その嫉妬の感情で地獄の苦しみを味わいました。あの男を死ぬほど憎みました。私を女にした運命を呪った。（中略）勇気をふりしぼってあなたに真実を告げることはできなかった。そんなことをしたらとてもみじめで滑稽ですもの。あなたがすべてを知った今、私のことを軽蔑したりしないで下さい。私の悩み苦し

をあなたは感じとってくれるでしょう。(中略) さようなら。幸せなときに時々、あなたのことを心から愛した、滑稽でかわいそうなおバカさんのことを思い出してちょうだい。

クラブト=エビングは、この女性の身体的な二次性徴を女性性と男性性が相半ばすると記している。水治療法の施設に送られたこの女性は、水治療と暗示治療が功を奏して、同性愛症状はなくなった。その後長い年月を経て、少なくとも性的には中性的になり、慎重深い婦人として振舞うようになったという。

レズビアンとしての性的アイデンティティをなかば獲得しながらも、彼女はそれを足場にして開きなおることはできなかった。それは先のXのように自分と同類の仲間を見出せなかったからか、あるいは自立できる職業をもたなかったからかもしれない。性的アイデンティティが確固としたものとして内面化されるには、自分の内面を言語化するだけでなく、共感しあえる仲間も必要なのである。彼女の場合は、フランスのレズビアン小説を読み、また好色な仲間から教えられて自分の倒錯性を意識したと書いている。しかしその仲間とは共感や精神的な絆をもつまでには至らなかったようだ。

最後に、悲痛ではあるが、同性愛者として誇りをもって生きていこうという決然とした覚悟を表明した以下の引用を紹介して、この章を終わりたい。

私の苦悩の歴史をできる限りきちんと書き記すことの動機は、この自伝によってある程度「反対的性感情」について広くいきわたる誤解やとんでもない誤りを正したい、という願望があるだけである。(中略) 大衆が感じるのと同じように私たちが感じることができないというのは、我々が悪いのではなく、自然の残酷な気まぐれのせいなのである。科学が、あるいは自由で偏見のないその僕の誰かが「自然の継子」たる我々に法と人権の面でもっとまじな立場をもたらし方途を考え出してくれないものかと期待した。(中略) 反対的性感情について完璧に解明し、定義してくれる人が、誰かいなものか。(中略) それができれば、人類は、名誉となる不滅の記念碑を建立することになるだろう。そしてその暁には今生きている、そして将来の世代にわたるあまたの人々によって大いに感謝されることだろう。いつだって、そしてこれからもずっと、考えられているよりもはるかに多くのアーニング (urning、男性同性愛者) が存在するのだから。⁽²⁵⁾

4. イギリスの場合——ジョン・アディントン・シモンズの症例と自伝

次に、性科学が到達していなかったイギリスに目を転じ、『性的倒錯』(1897年)に採用されている性的欲望の自伝的叙述の状況を、この本の消された著者、ジョン・アディントン・シモンズを通して考察したい。

世紀転換期において、イギリスの同性愛史を塗り替える画期的著作となるはずだった『性的倒錯』は1897年に刊行されたものの、たちまち発禁処分になり、初版のほとんどが廃棄されたこともあり幻の本となった。これはハヴロック・エリスの著作として知られるが、じつはこの研究はジョン・アディントン・シモンズとの共同作業の結果生まれた成果である。ところがシモンズは準備中の1993年に急死し、遺族が彼の名がその種の本に関わることを嫌ったために、シモンズの名はこの本の著者としては抹消されてしまったのであった。『性的倒錯』に採用された症例は、一般にはエリスが集めたと思われるが、実際はシモンズが収集したものである。そしてシモンズ自身も自らの症例を寄せていた。

後に『性的倒錯』として形をなすことになる研究をもちかけ、エリスを説得したのはシモンズだった。二人は最後まで直接相見えることなく、文通のみで情報交換をしていたから、1890年から始まる『性的倒錯』のための二人のやりとりのすべてが手紙の形で残されている。シモンズが『性的倒錯』に貢献したのは歴史的な内容面であったが、もう一つ大きな貢献が症例となる自伝を収集することだった。彼はウルリヒスとクラフト＝エビングの手法を研究してそれを参考に質問票のスタイルを自分で作り上げていた⁽²⁶⁾。ドイツやオーストリア、フランスといった国々では性科学がそれなりに進展していたが、性的な事柄を扱うことに対して特殊な抵抗意識をもつイギリスにだけは性科学が及んでいなかったため、シモンズはこの分野を独自に開拓するイギリスの隠れた第一人者だったのである。隠れた、というのは、高名な医者をもつ父に典型的な上層中流階級の出身で、かつ非常に因習的な女性キャサリンと家庭を築いていたシモンズにとって、自分の性癖は言うに及ばず、こんなテーマの研究をしていることは決して公にはできなかったからである。同性愛を扱った先駆的研究である『ギリシャ倫理の問題』(1883)、『現代倫理の問題』(1891)ともに私家版として刊行し、周囲の親しい人に配られただけであった。

1892年12月に書かれたエリスの手紙によると、この段階でエリスは、「性的倒錯、あるいは心理的両性具有者で著名な人の詳細な症例が3〜4あるのが望ましいと考えている」⁽²⁷⁾としている。二人がどのような想いで自伝的症例を収集していたかを、以下、書簡から概観したい。93年1月のシモンズの手紙では、ロンドン在住の友人が約12人の自伝を集めてくれたとある。エリスはこれを受けて、「イギリスで集められたこの種の自伝はまだ活字にされていないし、それが大陸のものに似ていると想定する理由もない」から、「症例はいくら多くても多すぎるということはない」⁽²⁸⁾と書いている。さらにエリスは「自分が知る限りイギリスの医学的専門雑誌にはただの一つもイギリス人のセックスの症例が載ったことはない」と付け加える。このやりとりからも、二人はイギリスで前代未聞の研究をしていると意識し、この事業に誇りと熱意をもっていただことがわかる。2月にはシモンズはイギリス人の倒錯者の自伝を選びすぐって16例集めたことを報告するが、「ウルリヒスやクラフト＝エビングらの著作が流布しているせいで、こうした告白にある種の「定式化したスタイル」が確立されているかもしれないと懸念している」⁽²⁹⁾と述べる。シモンズは文筆家だけあって、先にあるスタイルが語りの方向を決めてしまうことを意識していたことが

わかる。この自伝を読んだエリスは、「どれも掲載に値する」⁽³⁰⁾ 素晴らしいものだとは絶賛し、それを「君が準備した一連の質問」のお蔭であるとする。シモンズは称賛に気をよくして、「気に入ってもらえてうれしい。作るのにずいぶん苦労したんだ」⁽³¹⁾ と返信している。二人の症例収集は次第に熱を帯び、エリスがシモンズに充てた3月3日の手紙では、「少なくとも異性愛的欲望と同じくらい強い同性愛的欲望をもつ者で、イギリス人の倒錯者を何人知っているのか教えてくれたまえ」と尋ね、今までのところ男性の自伝が16例集まったとする表を作成している。ところが二人の文通はここで突然途絶えた。シモンズが4月に旅行中のローマでインフルエンザに罹って急死したのである。

シモンズは、友人らの自伝を収集したのみならず、自らも自伝を書いた。一つは長大な作品として、もう一つは自分が考案した質問票に従った症例として。もちろん後者は『性的倒錯』のなかに症例18として掲載されている。イギリスを代表する性科学者と目されるハヴロック・エリスさえウルリヒスをまだ読んでいなかった時点で、すでにウルリヒスをはじめとする大陸の性科学に精通していたのがシモンズである。じつに彼こそが水面下でイギリスの性科学事情を牽引していたリーダーなのであった。そこで最後に、シモンズの自伝を概観しながら、彼が自分の同性愛をどう意識しているか、どうアイデンティティをつくりあげているかを検討したい。

シモンズが『回想録』(*The Memoirs*)と題する自伝執筆に着手したのは1889年のことである。これはもともと刊行する意図なく書かれたものだった。シモンズは、「こんな不毛な自己叙述を書くために何か月にも渡って金になる仕事を中断し、数多のオファーを断らなければならなかった」⁽³²⁾ と託つ。「しかし自分にはその目的は明らかなだ。もし友人がこれを読んだら、自分がこの文章を書くために払った犠牲を思い涙してくれるだろうし、人間について研究する人間であれば、この文章を書くにあたって精一杯誠実であろうとしたその努力を評価してくれるだろう」。出版するつもりがないと言いながら、いつの日か読んでくれる人がいることを期待して書いたのである。

三つのパートに分けた記述のうち、第三部は故国を捨ててスイスのダヴォスに居住してからの知的、感情的、宗教的経験に充てたものだが、この第三部はそれまでの人生を要約するものであり、また同時に過去の人生に対するコメントともなるだろうと彼は述べる。ダヴォスに本拠地を据えてからの暮らしは、彼の人生の総決算であり、人生全体に意味を与え、帳尻をつけるものであると認識していたことが窺える。それもそのはず、ダヴォスでの生活こそ、同性の友人・恋人を常にもち、イギリスでは考えられないくらい大らかに自らの同性愛的欲望を解放させ、満足させた時代だったからだ。幼少期からの記憶、青春時代を彩った思い出、そうしたすべてが彼の人生の総決算に意味をなす何事かとして、ダヴォス時代に収斂される。そのためには、自らの性的欲望を解放し、同性愛者としてのアイデンティティを確立させる必要があったということなのである。4年後に控える自らの死に対する予期があったのか、彼は同性愛者として生れ落ち、煩悶と苦闘のうちに手さぐりで歩んできた人生に一貫した意味を与えるためにこの自伝的告白をせずにはいられなか

ったのだろう。人生を意味あるものにするとは、生きられた人生を物語にすることに他ならなかった。その物語の方向を決定づけるエピソードこそ、同性愛者として生きることであつたのだ。以下で、率直であることに命をかけて彼が書いた人生の叙述を垣間見てみよう。

シモンズは幼い時から虚弱で神経質な子供だったが、幼少時から特段少年に興味があるとか男の子の遊びに関心がないなどということとはなかった。シモンズが在籍したハーロウ校は少年同士の性愛が蔓延することで悪名高いパブリックスクールの例にもれなかったが、彼はここで同性愛の洗礼を受けたわけではなく、むしろ嫌悪感をもっていた。長じて結婚を考える頃には、自分のなかの男性を好む性向をはっきり意識するようになっていた。その頃彼は頭と眼の神経疾患と性器に障害をもっていたが、シモンズは満たされぬ同性への欲望のせいだと考えていた。医者のアドバイスを受け、気が進まぬまま名家の出身のキャサリンという女性と結婚するも、女性との肉体的接触には「何か吐き気を催させるものがあつたし、私の場合、同棲生活はただ自然的欲求を機械的に除去するためのものというにすぎなかった」⁽³³⁾と告白する。「女性との交渉に満足を見出せない」性的欲望をもって生まれてきたのだとも言う⁽³⁴⁾。

妻が夫の性向を知ることになるのは、結婚して5年後のことだった。シモンズは10歳年下のハーロウ校の学生（エドワード・ノーマン・ムーア）と恋に落ちた。少年の頻繁な訪問に疑問を抱いた妻に、シモンズは正直に自分の性向を告白した。妻のキャサリンは性の営みを嫌悪する女性だったことから、彼女はシモンズのノーマンへの感情と交際についても黙認した。とはいえ、ノーマンに宛てた手紙を読んだキャサリンが、自分に向けることのない感情を読んで嫉妬したこともあつたという。シモンズとノーマンの関係は当初はプラトニックなものだったし、最後の所（肛門性交と思われる）には行かないと決めていたというものの、裸体のノーマンとベッドを共にしたときの手記があることからその関係は肉体的だったとみてよい⁽³⁵⁾。

1877年に彼は家族と共に療養のため、スイスのダヴォスに移住した。そこを拠点に頻繁にイタリア旅行に出かけていたシモンズは、81年にヴェニスでアンジェロ・フサートという gondola 漕ぎと出会い、恋に落ちる。そしてダヴォス時代の彼の人生にとって非常に重要なエピソードであると彼自身が認める関係が始まった。浅黒い肌の色をした当時24歳の若者には、内縁の妻と娘がいた。貧しすぎて結婚もできないというアンジェロにシモンズが職の世話をしたお蔭で彼は結婚できた。「社会のしきたりに照らせば狂気と罪において始まった関係」⁽³⁶⁾ではあつたが、その交際によってアンジェロは経済的な利益と安定を得、シモンズは精神の安定を得た。『回想録』執筆時点でこの交際を、シモンズは満足げに振り返りそう総括した。「私の異常な欲望がなかったなら、社会的地位、教育、国民性と肉体がこれほどかけ離れた人間と知り合うことはなかっただろう」。シモンズはこうした関係を「同胞愛」(comradeship)と称する。自分が男娼などを相手にその場限りの関係を結んだことも数多くあることを認めながらも、「同胞愛」は快樂のみを求めるその種の関係とは

違う、もっと責任感を伴うものであるとシモンズは力説する⁽³⁷⁾。この主張に、同性愛を肩に力を入れて正当化している気配がいくらかあるのは否めない。

『回想録』の半ばで、つまり 1889 年時点でシモンズは、自分がこの自己語りを書いた目的を表明する。自分と同じような病に悩む者らが決して一人ではないと感じ、ともすれば社会的に抹殺されるかもしれない重荷にあえぐ者でも、忍耐と活力を要する傑出した職業の道を追求することができることを知らしめたいのだと⁽³⁸⁾。もう一つの目的は、生涯にわたる欲望との闘いとそれによる緊張と神経疲労のために自分はいつ狂気に陥るかわからないという恐怖を常に抱いているが、最悪のときのために自分の行為の説明を残しておきたいからである。「そうである以上、今自分が行っているこの分析が、苦痛を伴い、これからしなければならぬ告白がどれほど尋常ならざるものになろうと、私は決してひるみはしない」。

この自伝の掉尾で、シモンズは家族に対する思いを述べる。妻への愛は語られないものの、彼は妻公認の奇妙な二重生活を家族への愛情—主に娘たちへの—をもって「立派に」続けてきた。しかし、この率直かつ正確な自分語りの結末を控えて、家族を思うときだけは、この特殊な情熱とともにあった自分の人生に痛恨の情を禁じ得ないと告白する⁽³⁹⁾。そして、ダヴォスに居住する 14 年間に書き上げた著作のタイトルを羅列し、これだけの仕事をこなした自己管理と強靱な意志を誇る一方、その間自分の深いところに根差す倒錯した性本能を意識しないことはなかったとも語る。だからこそこんな長い告白を書いたのだ。「これは奇妙な人生履歴である。とはいえ自分が想定するよりも、もしかするとよくあることなのかもしれない」⁽⁴⁰⁾。というのもこの文章を書いたのちに大陸で刊行された多数の性科学文献—もちろんクラフト＝エビングも含む—を最近読んで、自分のものは無数にあるものの一例にすぎないことがわかった、と注に記しているのである。社会から抑圧され、禁じられた性的欲望をもつ者らにとって自分を語る言葉と、人生に意味を与えてくれるストーリーがあること、そしてそのストーリーを共有する仲間がいると知ることの意識が、性的アイデンティティの形成にとって大きな意味をもっていたことをここで確認できる。この認識こそが、後に『性的倒錯』として世に出ることになるプロジェクトにエリスを誘う契機になったのではないかと考えられるのである。

終わりに

シモンズは情熱を傾けた同性愛研究が『性的倒錯』として結実するのを待たずに亡くなった。遺志を継いだエリスは、1895 年のワイルド裁判直後の逆境のなかで苦労したあげくようやくエリスとシモンズの名を共著者として冠した初版を 97 年に刊行した。しかるに、彼の同性愛を忌避していた未亡人は、彼の名が記された『性的倒錯』の刊行は彼の名誉を損なうとする他の人々の助言を受け、シモンズ死後の著作権管理人であり、シモンズの友人のホレイショ・ブラウンを介して出版を妨害させた。刊行されたのちにはブラウ

ンができる限り多数の著作を買い上げその殆どを廃棄した⁽⁴¹⁾。出版を意図せずに書かれたという『回想録』は死後、ブラウンが管理していたが、彼はロンドン図書館にこの原稿を遺贈した。紐で結わえられ、緑の紙の箱に入った手稿には「彼の死後 50 年間は刊行しないこと」というメモが付されていた。偶然この手稿の存在を発見したシモンズの伝記作者であるフィリス・グロスカースが編纂してこれを刊行したのは、1984 年のことであった。シモンズが意図したように、悩み苦しむ同性愛者がこれを読んで勇気づけられるというには、あまりにも遅きに失していた。

エリスはイギリスで『性的倒錯』を刊行する前年に、同書をドイツで刊行していた。性科学のこの種の文献が珍しくもなかったドイツでは、何ら特段の反響は起こらなかった。翌年イギリスで刊行された初版は殆どがブラウンに廃棄されたから、エリスは自分一人の名前で同書を刊行することを目指し、いかがわしい出版社を見つけて、ようやくそこからの刊行に漕ぎつけた。しかしその直後に「猥褻な出版」として発禁処分を受けた上に、医学者と法律家のみに販売されるとして出版されたにもかかわらず、一般向けに販売したという廉でジョージ・ベッドバラという書店主が逮捕され裁判にかけられた。ベッドバラは有罪判決を受けたが、著作そのものとエリスの訴追は免れた。とはいえ、ベッドバラはエリスの犠牲となったのであり、見せしめであることは誰の目にも明らかだった。エリスはイギリスでの出版をあきらめ、アメリカのランダム・ハウスからこの本と、以後の『性心理学研究』の続巻を刊行した。

そもそもシモンズがエリスにこの共同作業をもちかけたのは、医学関係の書き手としてのエリスの権威を帯びることで、世間から真面目に扱ってもらえるだろうと期待したからであった⁽⁴²⁾。医学的テキストの体裁を装うことで、性的倒錯者が犯罪者などではなく、また倒錯者であるだけでない、その前に普通の人間であることをより一層、広く世間にアピールできると考えた。リスペクタビリティの規範意識がことの他強かった世紀末のイギリスにおいて倒錯者の社会的および法的な立場の改善と向上をエリスとシモンズは目指した。その志半ばにして逝ったシモンズが、倒錯と病理に彩られた人生の真実を率直に語った自伝は同時代の日の目を見ることは叶わなかったが、症例 18 としてエリスに提供した語りは、『性的倒錯』のなかで圧倒的な詳細さと存在感でもって異彩を放ち、同じ性向に悩む同時代の者たちに力と希望を与えたに違いない。

シモンズ自身が提供した症例の末尾でもって本稿を終えたい。

……男性との性的接触は彼にとってまったくもって健康的なことであると確信している。こうした関係によって、肉体的、精神的および知的エネルギーが充満するのを彼は感じている。しかも他の誰に対しても害をなすことはない。文人として彼は、自分自身のこうした感情を表出する芸術上の表現様式を自らに閉ざしてきたことを後悔している。彼は自分の行為（男性との恋愛、挿入引用者）において道徳的な誤りなど何もないと確信している。彼のような者に対してとる社会の態度は誤った道徳律に拠っ

て立つ、理にかなわぬ謬見と考えている。⁽⁴³⁾

シモンズのその思いが社会に受け入れられるのにはさらに長い歳月がかかった。「誤った道徳律」はともかく、「誤った」法律が撤廃されるまでには、イギリス社会はワイルドだけでなくもう一人のスケープゴートを要した。1954年のモンタギュー事件の被告、ピーター・ワイルドブラッドである。このジャーナリストが公の場で、自分は同性愛者である、と公言したことで初めてイギリス社会はクラフト＝エビングが唱え、シモンズが受け継いだ同性愛という概念を認識した。これを機に『タイムズ』が生得的な同性愛者を法で裁くことの不当性を問題にし、世論も法の撤廃を支持しはじめた。1957年にウルフェンデンを座長とする委員会が「成人同士で行われる私的な同性愛行為を犯罪とするべきでない」とする見解を報告し、これを罰する法律が撤廃されたのは1967年。ようやくシモンズの遺志が果たされたのである。

— 注

- (1) ミシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰—』田村俣訳、新潮社、1997年、194ページ。
- (2) Harry Oosterhuis. *Stepchildren of Nature: Krafft-Ebing, Psychiatry, and the Making of Sexual Identity*. Chicago: The University of Chicago Press, 2000.
- (3) *Ibid.*, p.212.
- (4) Sean Brady. *Masculinity and Male Homosexuality in Britain, 1861-1913*. London: Palgrave Macmillan, 2005.
- (5) H.G.Cocks. *Nameless offences: Homosexual Desire in the 19th Century*. I.B.Tauris: New York and London, 2003.
- (6) この節の記述は以下に拠る。Oosterhuis, *op.cit.*, pp.77-99.
- (7) Edward Shorter. *A History of Psychiatry: From the Era of the Asylum to the Age of Prozac*. New York: John Wiley, 1997. pp.99-109.
- (8) Oosterhuis, *op.cit.*, p.117.
- (9) *Ibid.*, p.117.
- (10) *Ibid.*, p.135.
- (11) *Ibid.*, pp.238-42.
- (12) *Ibid.*, p.117.
- (13) *Ibid.*, p.139.
- (14) ミシェル・フーコー、前掲書、188ページ。以下の記述は同書、第二章「良き訓育の手段」に拠る。
- (15) 同前、195ページ。
- (16) Oosterhuis, *op.cit.*, p.216.
- (17) Peter Gay. *The Naked Heart*. Vol.4, *The Bourgeois Experience: Victoria to Freud*. New York: Oxford University Press, 1995, pp.113-14, 178, 343-45.
- (18) ジャン・ジャック・ルソー『告白 (上)』小林善彦訳、『ルソー選集 1』(上)、白水社、2006年、4ページ。
- (19) Oosterhuis, *op.cit.*, p.220.
- (20) *Ibid.*, p.222.
- (21) Alasdair MacIntyre. 'The Virtues, the Unity of a Human Life, and the Concept of a Tradition'. In *Memory, Identity, Community: The Idea of Narrative in the Human Sciences*, eds. L.P. Hinchman and S.K. Hinchman. Albany: State University of New York Press, 1997, pp. 254, 249.
- (22) *Ibid.*, pp.245, 253, 254.
- (23) Henry Maudsley, "Deutsche Klinik," (1873, 2, 3), quoted by Richard von Krafft-Ebbing. *Psychopathia sexualis*. New

- York: Arcade Publishing, 1998, p.1.
- (23) *Ibid.*, p.3.
 - (24) *Ibid.*, pp.247-253.
 - (25) Oosterhuis, *op.cit.*, p.228.
 - (26) Sean Brady. *John Addington Symonds and Homosexuality: A Critical Edition of Sources*. London: Palgrave Macmillan, 2012, p.251.
 - (27) *Ibid.*, p.235.
 - (28) *Ibid.*, p.246
 - (29) *Ibid.*, p.251
 - (30) *Ibid.*, p.253.
 - (31) *Ibid.*, p.255
 - (32) Phyllis Grosskurth ed., *The Memoirs of John Addington Symonds: The Secret Homosexual Life of a Leading Nineteenth-Century Man of Letters*. Chicago: The University of Chicago Press, 1984, p.29.
 - (33) *Ibid.*, p.157.
 - (34) *Ibid.*, p.158.
 - (35) *Ibid.*, p.209.
 - (36) *Ibid.*, p.276.
 - (37) *Ibid.*, p.277
 - (38) *Ibid.*, p.183.
 - (39) *Ibid.*, p.279.
 - (40) *Ibid.*, p.281.
 - (41) Sean Brady, *op.cit.*, p.32.
 - (42) Havelock Ellis and John Addington Symonds. *Sexual Inversion: A Critical Edition*. Ivan Crozier ed.(London: Palgrave Macmillan, 2008), p.59.
 - (43) *Ibid.*, p.147.